More than Five II
——共感覚が浮き彫りにする感覚(英語の場合)——

山 田 仁 子

More than Five II: Three More Senses in English Synesthetic Metaphors

Hitoko YAMADA

Abstract

This paper is a continuation of Yamada (1992), which deals with Japanese synesthetic metaphors. I showed that the adjectives of "dimension," "movement," and "mood" were found in Japanese synesthetic metaphors, modifying the experiences of a sense, and argued that these adjectives were functioning as lexemes of "sense" like the commonly known "five senses" — touch, taste, smell, vision, and hearing —, in the linguistic system of Japanese.

In this paper, synesthetic metaphors are examined, and it is argued that the same three "senses" exist in English. Expressions like "deep sound," "quiet color," and "cheerful color," which synesthetically describe sensory experiences, indicate that there are some other senses other than the commonly known five. If these expressions are synesthetic metaphors, the adjectives must be words proper to some sense. But they can not be classified into the "five senses."

These adjectives can be classified into three groups by the meaning and by the senses they can modify. Each group consists of words of "dimension," "movement," and "mood." This result is quite similar to that of Yamada(1992) on Japanese synesthetic metaphors, and this coincidence suggests the possibility that these three senses are universal.

With three new senses, I present a new schedule an adjective transfers from one sensory modality to another, on the basis of Williams' (1976). The fact that the three senses can be formed into the schedule of senses provides evidence that the adjectives of "dimension," "movement," and "mood" hold the status of "lexemes of sense" in the language of English.

序

本稿は山田（1992）の続編である。山田（1992）では日本語を対象に、本来五感を表すための形容詞でないのにも拘らず、共感覚比喩によって五感を表す形容詞が存在すること、更に、こうした形容詞の存在はひいては五感以外の感覚の存在を示すことを論じた。今回本稿では、英語における共感覚比喩を分析し、英語においても同様の現象が見られること、つまり五感に固有の形容詞でないのにも拘らず、共感覚比喩によって五感を表す形容詞が存在し、五感以外の感覚の存在を示していることを論じる。

前編の繰り返しになるが、その論のあらましをここでもう一度確認しておきたい。

まず誰もが感覚と認めている“五感”を表す表現に基づいて、感覚がいかに表現されるものであるかを整理しておきたい。五感に固有の形容詞は“君は頭が固いんだよ”“ゆりちゃんのパパは甘い”といった具合に、感覚以外の事物や人間に関する印象を表現することはできる。しかし逆に五感で感じる感覚経験を表現しようとする時、その表現方法は非常に限られているのである。

感覚を表す表現方法は次の三通りに分けられる。まず第一にそれぞれの感覚に固有の表現が挙げられる。“固い手触り”“甘い味”“くさい匂い”“うるさい音”“赤い色”などがこれにあたる。第二に、共感覚比喩表現が挙げられる。ある感覚経験をその感覚に固有の表現ではなく、共感覚に基づいて、他の感覚に固有の表現で表すのである。例えば“柔らかな味”“甘い色合い”といった具合に、触覚に固有の表現で味覚を、味覚に固有の表現で視覚を表すことができる。第三に具体的、説明的な表現がある。つまり、感覚経験を引き起こす原因、あるいはその結果状況を説明することにより、聞く者にその感覚を類推させるような表現である。“汗の匂い”“栗のはぜる音”“思わず顔が歪んでしまうような味”など、この種の表現は自由に数限りなく作り出される。

このように感覚を表す表現方法に三通りあることを踏まえた上で、次の例を見てみよう。

(1) 低い音
(2) 激しい辛さ
(3) 寂しい色

(1)〜(3)の例はそれぞれ聴覚、味覚、視覚の感覚経験を表しているが、形容詞はそれぞれの感覚に固有のものではない。具体的に説明してもいない。先に見

た感覚を表す三通りの表現方法のうちあてはまる可能性が残るのは、第二の共感覚比喩のみである。もし共感覚比喩でないとすると、感覚の表現方法を新たにもう一つ規定しなければならないことになるが、高さ低さと音、激しさ穏やかさと味、寂しさと色の結びつきが感覚的であることは、誰しも認めるところと思われる。

“低い”“激しい”“寂しい”などの語が共感覚比喩表現における形容詞として用いられるとすると、こうした形容詞は言語現象においては五感に固有の形容詞と変わらぬ位置を占めていることになる。言語においてはこのような形容詞が五感と同レベルの何等かの“感覚”を表すと考えられるのである。五感に対する目や鼻といったような受容器官がはっきりしているわけではないが、少なくとも言語を見る限りにおいては、人間が無意識にではあれ“感覚”として認識するものが、五感以外に存在していることを、共感覚比喩は証明している。(1)〜(3)の例で(1)の“低い”は“空間における物の位置/在り方”を、(2)の“激しい”は動きを、そして(3)の“寂しい”は気分を表しているが、五感に固有の形容詞以外で五感を形容する形容詞を収集してみると、そのほとんどがこの三種の意味に分類できる。よってこうした三種の“感覚”が言語には（あるいは人間の認識構造の中には）存在しているのではないかと思われる。ここでは仮に“次元”“動静”“気分”の感覚と呼ぶことにした。

以上は日本語における共感覚比喩を分析した前稿の結論であるが、本稿では英語における共感覚比喩を分析する。英語においても(1)〜(3)のような表現が数多く存在する。更にこうした表現に用いられる形容詞を収集してみると、やはり日本語の場合と同様“次元”“動静”“気分”を固有に表すものが数多く存在することがわかるのである。以下、この三種の形容詞を用いた共感覚比喩について考察していく。

尚、“快／不快”“強／弱”を表す語も五感を表せる。日本語の“いい”“わるい”“強い”“弱い”も英語の good, bad, strong, weak も味(taste)や匂い(smell)を形容できるように、これは日本語にも英語にも共通して言えることである。ただし、“快／不快”“強／弱”を表す形容詞については共感覚比喩において、他の感覚形容語とは異なる性質があると思われる。この種の形容詞については、また別の機会に考察を加えることとしたい。

五感以外にも更に3つの感覚があるとすると、Williams(1976)が提唱した共感覚比喩の体系も見直さなければならないことになる。Williams を始め共感覚比喩を扱う論文においては共感覚比喩による感覚間のつながりに一方向性が見られることが指摘されている。例えば、“sweet smell” “sweet voice”というよ

うに味覚の形容詞で嗅覚、聴覚の経験を表現することはできるが、逆に嗅覚、聴覚の形容詞で味覚経験を表現することはできない。Williams の共感覚比喩の体系は、視覚が色と次元に分けられていて、以下のとおりである。

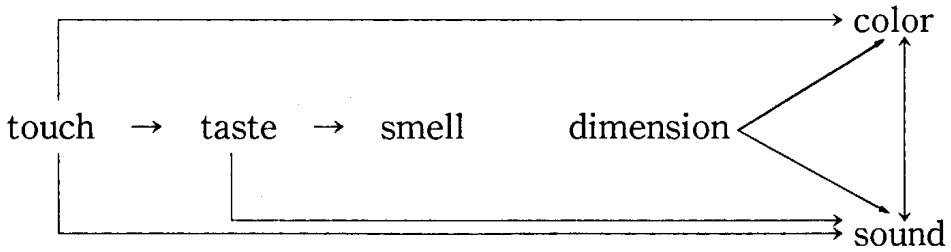

FIGURE 1. Williams の共感覚比喩の体系

Williams は、次元を視覚的に捉えられるものと限定しているので、一般的に視覚と言われるものを、ここでは“次元”と“色”に分けた形になっている。“色”が目から受容する感覚であることに異論はないが、“次元”に関しては目だけでなく皮膚や身体全体も受容器官となると思われる。本論では次元は視覚とは別個の独立した感覚であると捉え、また視覚を表す名詞としては“色”の他に“光”も加えて考察することとする。以上6つの感覚に“動静”“気分”を加え全8つの感覚間で、その方向性がどのようになっているのか、共時的及び通時的に考察し、共感覚比喩の新たな体系を提示したい。

次元感覚

次元については、Williams(1976)を始め幾つかの共感覚比喩に関する論文において五感と同じに扱われている。[1] 具体的には“deep color”“thick voice”といった表現において、次元を表す形容詞が視覚、聴覚など他の感覚経験を表現している。[2]

次元を表す形容詞について他の感覚経験の表現可能性をまとめると次の

1）ただし、序文でも述べたように Williams(1976)の言う次元は視覚的に捉えられるもの（“*visually perceived* dimension”）であり、次元をいわば視覚の一種としている。しかし本稿で提示する次元の感覚は、視覚のみならず触覚、嗅覚、聴覚などあらゆる感覚に用いられる受容器官を全て使って感じる感覚であるとしたい。例えば目が見えない人でも“高い”“低い”“広い”“狭い”といった空間に関する情報は知覚する。次元感覚の受容器官はいわゆる五感とは異なり、一つに限定されるものではない。手足や皮膚、鼻、目、耳、全てがその受容器官となりうる。

2）各例においては、問題となる感覚の形容詞に下線を施している。

TABLE 1のようになる。

	TOUCH	TASTE	SMELL	SIGHT	HEARING	MOVEMENT	MOOD
HIGH		○		○ color	○	-wind	○
LOW				○ light	○		○
UP					○	-wind	○
DOWN					○	-sea	○
LOFTY					○	-wind/sea (*arch.*)	
FLAT		○		○ color	○		△ flatly
MODERATE				○ color	○		
DEEP				○ color	○		
SHALLOW					△		
BROAD				△ Art.(color)	△		
THICK		△ soup, tea	○		○		
THIN		△ soup, tea/ liquor		○ color/light	○		
GREAT		○			○		○
SMALL		△ liquor			○	-wind	○
LITTLE					○		
FULL		△ liquor etc.	○	○ color/light	○		
EMPTY							○
HOLLOW					○		
ABSENT							○

TABLE 1 .

次元以外の感覚経験としては、本稿の後の方で論ずることになるが、“動静”“気分”もいわゆる“五感”以外の感覚として項目に加えている。表現可能性の判断については、それぞれの感覚に対応する名詞、touch, taste, smell, color/light, voice (or sound), movement, mood を次元の形容詞が形容できるかどうかを中心に判断した。視覚については色(color)と光(light)とで使用状況がかなり異なるため、どちらとの組み合せが可能なのかをそれぞれ記している。表の

左端に挙げた次元形容詞が限定・叙述用法の何れかで問題なく形容できる場合を○、特定の対象についてのみ許される場合や古い用法で例がある場合を△で示し、特定の対象に限られるものは、その対象を付記する。ただしここでは、特殊な状況により容認可能性が高まるような場合はとりあえず除外している。詩などにおいてはもっと自由な組み合わせが可能となるが、本稿ではこうした場合は扱わないことにする。

尚、第二節および第三節でも“動静”“気分”を表す形容詞について、他の感覚経験を表現する可能性をまとめた表を提示するが、その場合の表の表し方、見方はこの次元に関する表に準じるものとする。

TABLE 1で組み合わせ可能としたものについて、主な例を次に挙げる。ただし組み合わせは同じでも、表す意味が時代によって変化しているものもある。たとえばhighが味覚を表す場合、(4)では“味わい豊か”といったいい意味で用いられているが、(5)の現代の用例では“腐りかけの味がする”といった悪い意味で用いられている。

(4) Almonds that are not of so high a taste as Flesh.
-1626. Bacon, *Sylva* §48 (*OED*)

(5) I think this cheese is a bit high, even for my taste. -*Cobuild*

(6) She is wearing a flaming pink dress which is yet no match for her pink complexion and the high pink in her cheeks.
- Mailer, *Maidstone* (小西(編), 1989)

(7) Apart from the area where the keycharge advertising had been spread out, the apartment lights were low.
- Hailey, *Moneychangers (Ibid.)*

(8) Your work is slipping because you are feeling so low. - Cobuild

(9) Her mood was up. - Segal, *Oliver's* (小西(編), 1989)

(10) With one consent the people rejoice Filling the church with a lofty voice. -1814. Wordsworth, *White Doe Ryl.* I.38 (*OED*)

(11) The stew is too flat. - *Web.3*

(12) Arnold went on, his voice flat, neither menacing nor inviting...
- *Cobuild*

(13) The monitors must be trained to speak, when teaching, in a moderate voice. -1863. Joyce, *Sch. Management* 75 (*OED*)

(14) He had deep blue eyes the color of cornflowers. - *Cobuild*

(15) It must needs make the Sound perfecter, and not so Shallow and Iarring. -1626. Bacon, *Sylvia* §223 (*OED*)

(16) Broad and rich in tone and color.
-1885. *Athenaeum* 30May702/3 (*Ibid.*)

(17) The females have a shrill and sharper voice then the males, which is fuller and broader. -1607. Topsell, *Four-f.Beasts* 258 (*Ibid.*)

(18) The smell of blood was rather thick and nauseating. - *Cobuild*

(19) She had a thick voice because of a cold. - *SFBD*[2] (小西(編), 1989)

(20) a thin green - *OED*

(21) 'Come in, ' he said in a thin, cracked voice. - *Cobuild*

(22) Her burgers are *really* great. -小西(編), 1989

(23) a great voice - *Web*.3

(24) "I feel great, Ted," he said for openers.
- Sanders, *Lucy* (小西(編), 1989)

(25) The wine was very thin and small. - *Web*.3 (*Ibid.*)

(26) He likes wine with a full body. - *LD*[2] (小西(編), 1989)

(27) a cheese with a good full flavour. - *Cobuild*

(28) places that are exposed to full sunshine throughout the day.
- *Ibid.*

(29) a fuller crimson - *OED*

(30) His full voice drowned out the piano. - *Pan* (小西(編), 1989)

(31) He felt empty and beaten. - *Cobuild*

(32) a hollow ring - *OED*

(33) She was absent, pre-occupied. - *Cobuild*

TABLE 1から分かるように、次元の形容詞は聴覚経験を表現するのにかなり自由に用いられる。次に多いのが気分を形容する例で、これに視覚（色を表すものの方が多い)、味覚（ただし酒など飲み物に限られるものが多い）が続く。動静についてはmovementそのものは形容できないが、風や海の荒れ様を表現する例が見られるのは興味深い。

次元を他の感覚で表現できるかという問題については、ここでいう次元を表す的確な名詞が見あたらないため、考察し難い。ただslope等の名詞に対しては、次の第二節でも触れることになるが動静を表すgentle, mildといった形容詞を組み合わせ可能である。また歴史的な意味の変化も考慮に入れるならば、

tallという現在は次元を表す語も、もともとは動静を表していた語である。またbigは強さを表していた。動静から次元、強弱から次元という方向性があるのかもしれない。しかしここで結論づけるには用例が少なすぎる。

動静感覚

本節で“動静”を表す形容詞を、次の第三節で“気分”を表す形容詞を見ていく。

“動静”“気分”はこれまで五感と同様の“感覚”とは扱われてこなかった。楠見（1990）においては“気分”を含む“心の状態”（他に記憶、性格、思考が挙げられている）が五感と次元の形容詞で表現されることが指摘されてはいる。しかし楠見が“心の状態”を示す語としたものの内“気分”だけは、感覚の形容詞で修飾されるばかりではない。もともと“気分”に固有の表現が他の感覚を形容する側にも立つのである。また“動静”についてはその共感覚比喩との関係は全く無視されてきた。五感のように明確な受容器官に対応する感覚でないことに加え、次元などに比べると動静を固有に表す形容詞が少ないことも、動静を独立したものとして捉え難くした要因と思われる。しかし動静についても気分と同様のことが言える。つまり、動静を表すことばも五感を表す名詞を形容できる。動静の感覚で他の感覚を表現することができるのである。

“動静”を表す形容詞が共感覚で他の感覚と結び付く可能性を表にすると次のTABLE 2、TABLE 3のようになる。判断の基準、表記方法は、次元感覚の場合に準じているが、ここでは歴史的な変化も考慮に入れて表を二つに分けることにしたい。ある感覚を表していた語が他の感覚をも表現するようになるという用法の変化は、共感覚比喩が定着することによって起きる場合が多いと思われるからである。一つ目の表TABLE 2では動静を表す用法が先にあった形容詞が、他の感覚を表すように変化したものについて、また二つ目の表TABLE 3では本来他の感覚を表していたものが動静を表すように用法が変化したものについてまとめることにする。この二通りの表により、動静の語が他のどの感覚を表現できるかという点と、逆に他のどの感覚で動静を表現できるかという点が、共に明らかになるであろう。表記方法については、動静の意味より以前に用法があったものを黒塗りの記号で示す。その内、現在も使われるものを●、古い用法でのみ例がある場合や、現在特定の対象についてのみ許される場合を▲とする。また、ほぼ同時期に初めの例が見られるものや用法発生の順が不明なものについては網かけの記号とし、◍及び△で示す。発生の順序は*OED*の記述、用例により判断した。尚、他の感覚との共感覚比喩によるつなが

りが見られない語は、表に加えていない。

	TOUCH	TASTE	SMELL	SIGHT	HEARING	DIMENSION	MOOD
BRISK		△ liquor/tea			△		
STILL		△ wine/juice			△		
QUIET				○ color	○		○
CALM					○		○
TALL *arch.*						○	
SOBER *arch.*				○ color			
DULL *rare* 1393	◍ c1400	○		○ color/light c1430	○1836		◍ c1393

TABLE 2.

tall, sober, dull については、動静を表す用法自体現在では見られなくなっているので、動静としての古い用例を次に挙げておく。

(34) Wǽron hyra tungan getale teónan gehwylcre and to yfele gehwǽm ungemet scearpe (= their tongues were swift to every wrong and to every evil exceeding sharp).
-c1000. *lingua eorum machæra acuta, Ps.Th.*56,5. (*Anglo-Saxon*)

(35) Our Newes shall goe before vs,...And wee with sober speede will follow you. -1597. Shakespeare, *2Hen*. IV, IV. iii. 86 (*OED*)

(36) Thenceforth her waters wexed dull and slow.
-1590. Spenser, *F.Q*. I, V ii. 5 (*OED*)

TABLE 2が示す動静の形容詞と他の感覚の名詞との組み合わせの主な例を次に挙げる。

(37) There is ... produced a considerably brisk noise.
-1660. Boyle, *New Exp. Phys-Mech*. I. 21 (*OED*)

(38) Gray is a quiet color. -*WBD*² (小西(編), 1989)

(39) Mother always speaks in a quiet voice when she tells my sister and me a secret. -Green *et al*. (小西(編), 1989)

(40) A quyete herte is as a contynuall feast.
-1535.Coverdale, *Prov.x.v*.15 (*OED*)

(41) Her voice was calm, just loud enough to make itself heard over the crowd. -*Cobuid*

(42) He felt calmer and more composed. -*Ibid*.

(43) jackets of sober charcoal grey. -*Ibid*.

(44) eating dull food and wearing shabby clothes -J.E.Evans (*Web*.3)

(45) The sea had been a dull grey. -*Cobuild*

(46) The lights of the houses gleamed dully on the hillside. -*Ibid*.

(47) In character of sound, the viol instruments were decidedly sweet, but comparatively dull. -1836.Dubourg, *Violin* i.(1878)II (*OED*)

(48) I often feel dull and awkward when I go to parties. - *Cobuild*

TABLE 2より、動静の形容詞が共感覚比喩により表現できる可能性が高いのは聴覚、続いて視覚（ただし“色”を表すもの)、気分、味覚（飲み物に限られる場合が多い）であることが分かる。

ただし、dullについては動静の用法とほぼ同時期に、他の触覚、気分といった感覚の用法が見られるので、視覚、聴覚等の用法が動静感覚からの比喩とは断定できない。

次に、本来は他の感覚を表していたものが動静を表すようになった形容詞について表にまとめ、動静の感覚が他のどの感覚に固有の形容詞で表現できるのかを探りたい。表の表記方法はTABLE 2に準じるものとする。例えば最初に挙げた項目のsoftの場合、この語は本来、触覚を表す形容詞であるが、その後、味覚(現在の用法としては*Webster*以外の文献に記載がない)、嗅覚(現在の用法は見られないので△)、動静を表す用法が順序は不明(網かけの記号がこれを示す）だが現れ、そのまた後に視覚、聴覚を表す用法が現れた（動静より後に現れ現在もある用法なので、白塗りの○）ことをこの表は示している。尚各々の用法が現れた順序を判断するにあたっては*OED*の語源解説に加え最も古い用例も参考にしたので、適宜その年を付記した。形容詞自体の下に記載の年は、動静としての用法が見られる年である。

	TOUCH	TASTE	SMELL	SIGHT	HEARING	DIMENSION	MOOD
SOFT c1440	● a1240	◬1398 現在は-drink のみか？	◬ c1400	○ color/light 1738	○1605		
GENTLE	◬1555				◍1605	-slope	
SHARP c1440	●	● c1000	○	○ light	◍1390		
ROUGH	●	○			○		
HEAVY a1400-50	●(weight) c1000		○1845		○1819		○
SULLEN(液体) 1622				◍ color 1665	◍1592		●
QUICK 1297		△1578	△1573	△color/light 1851 1818	◬ c1205	-curve	

TABLE 3 .

上の表が示す組み合わせの例を次に挙げる。

(49) Blood is swete and <u>softe</u> in taste and in towche.
-1398. Trevisa, *Barth, DeP.R*.IV.vii.(W.de W.1495)89 (*OED*)

(50) His seed ys reed, his odour <u>softe</u>, of good effect.
-c1400. tr.*Secreta Secret.,Gov.Lordsh*.92 (*Ibid*.)

(51) Their garments .. are verye softe and <u>gentle</u> clothe.
-1555. W.Watreman,*Fardle Facious II*.ii.120 (*Ibid*.)

(52) He greeted me with a very <u>gentle</u> voice. -*Cobuild*

(53) Lemons have a <u>sharp</u> taste. -*CULD* (小西(編) ,1989)

(54) an unpleasant <u>rough</u> taste. -*OED*

(55) That engine sounds a bit <u>rough</u>! -*Cobuild*

(56) a <u>heavy</u> smell of jasmine ... -Faulkner, *The Wild Palms*,36 (*Con*.)

(57) He had a very <u>heavy</u> bass voice. -*Scholastic* (小西(編) ,1989)

(58) I feel <u>heavy</u>. -小西(編) ,1989

(59) A dark <u>sullen</u> violet purple color. -1665. J.Rea, *Flora*130 (*OED*)

(60) I hear the far-off Curfeu sound, ... Swinging slow with <u>sullen</u> roar.
-1632. Milton, *Penseroso*76 (*Ibid*.)

(61) These two Purcelaynes are ... of a sharpe or <u>quicke</u> taste.
-1578. Lyte, *Dodoens* V.xx.574 (*Ibid*.)

(62) If white Saunders ... be old, and have no pleasant and <u>quicke</u> odour,

they are nothing worh. -1573. *Treas.Hid.Secrets* xliii (*Ibid.*)

(63) Other light, Though it be quick and sharp enough to blight the Olympian eagle's vision, is dark. -1818. Keats, *Endym.*II.918 (*Ibid.*)

(64) Slain are the poppies that shot their random scarlet Quick amid the wheatears. -1851. G.Meredith, *Love in the Valley* xx

(65) mid qvickere stevene (= in a loud voice)
-c1205. *Laz.*15873 (*Anglo-Saxon*, 括弧内は筆者)

gentle については最も古い用法は感覚を表すものでなく、「生まれがいい」といった意味であった。動静、触覚、聴覚を表現可能となった順序は *OED* の例からでははっきりしないが、一応表には加えておく。また quick は「命がある、生きている」というのがもともとの意味で、生命力という“強さ”を介して動きを表すに到っている。本稿では扱わないが“強弱”といった感覚を表す用法が先に存在したと判断し、表に加えている。

TABLE 3 から、動静を表す形容詞には、もともと触覚を表す形容詞から意味が派生したものが多いことが分かる。この表の中で触覚以外の感覚より後に動静を表すことになった語というのは、強弱から派生した quick と、気分から派生した sullen の二例だけである。またこの表にある形容詞のほとんどが、聴覚経験を表すことも可能である。動静を表す用法から聴覚を表す用法へ共感覚によって変化したわけではないかもしれない。触覚から聴覚という共感覚比喩による変化かもしれないが、動静を表す形容詞が聴覚経験も表すという傾向は先の TABLE 2 と共通している。触覚に固有の形容詞が動静の感覚を表現可能であるという点、また動静の感覚を表す形容詞が聴覚（続いて視覚）経験を表す場合が多いという点は、山田（1992）の日本語の共感覚比喩表現に関する結果と同じであるというのは、注目に値する。言語の違いを越えて同様の傾向が見られるということは、言語の枠を越えて人類に共通する認識構造といったものを反映しているからと予想される。

気分感覚

楠見（1988）では、“甘い思い出”“彼は冷たい人だ”というように、五感を表す表現が気分、記憶、考え、性格などの心的状態を表せることが示されているが、本来、心的状態を表す表現が五感を形容できるかどうかについては触れられていない。

しかし心的状態を表す表現の中でも“気分”を表すことばには、五感を表せ

るものがある。“気分”を表す形容詞が、五感に上の第一節、第二節で論じた次元、動静という二つの感覚を加えた七つの感覚の内、どの感覚を形容できるかを表で示す。前節の動静の形容詞の場合と同様、表を二通り設け、一つ目の表では歴史的にもともと気分を表した形容詞について、二つ目の表では本来は他の感覚を表していたものが気分を表すことになった形容詞についてまとめることにする。尚、“happy”など気分を表す語は他にもあるが、他の感覚を表す用法が、共時的にも通時的にもないものは表に加えてない。

	TOUCH	TASTE	SMELL	SIGHT	HEARING	DIMENSION	MOOD
CHEERFUL				○ color/light			
JOLLY				△ color			
SULLEN				○ color	○		-water
BOLD				○ color			-wind
MERRY a1380		◬1386	◬1386		● c1000		○
DAMP arch.	○非共感覚						
SAD a1366				◍ color c1412			
SOMBER 1821				◍ color 1805			
ANGRY 1375		◬1325					-sea (literary)
MAD							-wind/storm
FURIOUS							-storm

TABLE 4 .

上の表が示す組み合わせの主な例を次に挙げる。

(66) Forth we stepped Into the presence of the cheerful light.
-Wordsworth, *Excursion* II.514 (*OED*)

(67) The good effects of more cheerful colors.
-Burke, *Subl & B*.Wks.1842 (*OED*)

(68) An apple of Sodom ... with a florid jolly white and red.
-1688.South, *Serm., Prov*.xii.22 (*OED*)

(69) A dark sullen violet purple color. -1665.J.Rea, *Flora*130 (*OED*)

(70) I hear the far-off Curfeu sound, ... Swinging slow with sullen roar.

-1632. Milton, *Penseroso* 76 (*OED*)

(71) a building of bold red brick. -*Cobuild*

(72) The true Lorde Hastinges ... was neuer merier, nor thought his life in more suretie in all his dayes.

-1513. More in Grafton, *Chron.* (1568) II.781 (*OED*)

(73) Cassia is swete and mery of smell.

-1398. Trevisa, *Barth.De P.R.*xvii. xxvii (1495) 620 (*OED*)

(74) a merry tinkle of sounds. -*Cobuild*

(75) a merry pace -*Web*.3

(76) very sad black color. -*OED*

(77) somber dark green. -*Cobuild*

(78) Alum (= ale) & alka[t]ran (= port) that angré arn boþe.

- c1325. *E.E.Allit.P.*B.1035 (*OED*, 括弧内は筆者)

TABLE 4から分かるように、気分を表す形容詞は視覚、それも特に“色”を形容する場合が多く、他の感覚を表現するのは、聴覚に対して sullen が使えるという例と、動静に対して merry が使えるという例が見られる程度である。merry の味覚、嗅覚、聴覚に対する用法は気分の用法から共感覚により生まれた用法ではない。“快(pleasing)”という古い意味から様々な感覚に対する用法が生まれたのである。一方、動静の用法は新しく、気分の用法からの転用かもしれない。damp, sad, somber, angry については一見気分の感覚と他の感覚の間で共感覚による結び付きがあるように見えるが、実際には各感覚の用法は個別に派生している。例えば damp は本来“有毒ガス、蒸気”の意味であったのが、一つにはそれにあたった結果の状態からやがて“意気消沈した”という気分を表すようになり、また一方では有毒の意味あいが薄れ“湿った”という触覚を表すようになった。sad の場合も元は“full”の意味であったのが発展して、一つには“うんざり”から“悲しい”という気分の用法が生まれ、他方視覚の色について“暗い”、“深い”といった用法が別個に生まれたのである。“full”というのは次元を表すので、視覚（色）の用法への発展は第一節に見た“次元から視覚（色）”という共感覚の方向に一致している。もっとも視覚としての用法も変化し、現在では気分の用法と結び付く意味あいで使用され、そこには共感覚が働いていると感じられる。気分から視覚の色という方向は cheerful, jolly 等と一致する。somber は本来“影になっている”といった“明るさ（暗さ）”に関連した意味であった。それが一方では視覚の色を表す意味に発展し、他方、

気分を表す意味にも発展したのである。“明るさ（暗さ）”から気分という方向は次の表 TABLE 5 に見られる結果に重なる。angry も“困難な”といった一つの意味から味覚と気分の二つの用法が各々に発展した。

動静に関しては、movement そのものを形容できる例は少ないものの、海、風、嵐といったものの激しさを表す例はかなりある。だが、これは共感覚というより擬人法的捉え方の現れかと思われる。

次に、気分は他のどの感覚に固有の形容詞で表現できるかを、歴史的用法の変化により探る。TABLE 5 には現在気分を表す用法があるが、過去には他の感覚しか表していなかった形容詞を挙げ、本来表していた感覚を●で示している。参考までに気分を表す用法より後に現れたものについても、○（或は△）で示すことにする。例えば、cool は本来触覚を表す語であった（故に触覚の列に●）が、やがて気分を表す用法が現れ、その後、味覚、嗅覚、視覚、聴覚を表す用法も出てきた（気分を表す用法より後なので白塗り）ことを次の表は表している。ただし嗅覚については○でなく△であり、猟という特殊な場合にのみ用いられることを示している。

	TOUCH	TASTE	SMELL	SIGHT	HEARING	DIMENSION	MOVEMENT
BLUE				● color			
BLACK				● color	○		
BRIGHT 1605				● light → color	● a1000		
DARK				● light → color	○		
GLOOMY				▲ light → color			
WAN *Obs.*				▲ light → color			
MELLOW 1711	○1797	●	●	●	●		
COOL 8c.(Beowulf)	●	○1800	△(Hunting) 1647	○ color	○		
HOT a1225	●	○1596	△(Hunting) 1648	○ color 1896	○		
SOUR a1225		●	○ c1340	△(wood) c1475			
EAGER 1297	△1602	▲					
AUSTERE		●1541		▲1680			

TABLE 5 .

TABLE 5 上の表が示す用法の主な例を次に挙げる。

(79) If you are in a black mood ..., you feel very unhappy and depressed or very hostile and angry. -*Cobuild*

(80) a bass with a black voice. -*Web.3*

(81) Be bright and Iouall among your Guests.
-1605. Shakespeare, *Macb*.III. ii .28 (*OED*)

(82) the bright tones of a cornet. -*NWDY*[2] (小西編(1989))

(83) She's in one of her dark moods. -*EED* (*Ibid.*)

(84) a dark voice. -*Web.3*

(85) And the hew ... are gloomie and swarffee.
-1632. J.Hayward tr. *Biondi's Eromena* 187. (*OED*)

(86) Me for to were fro warkes wanne. -c1440. *York Myst*.vii.38 (*Ibid.*)

(87) Whose interchanged greene color resembleth almost the wan and yellow color of Golde. -1567. Maplet, *Gr.Forest* 3b. (*Ibid.*)

(88) When ... their glasses were filled with ... port, Mowbrayt grew a trifle mellower in mood. -1871. M.Collins, *Mrq. & Merch.* II.viii.234 (*Ibid.*)

(89) [Young cattle.] To be a good thriver ... the hair should feel mossy, and the touch of the skin mellow.
-1844. Stephens, *Bk.Farm* III.836 (*Ibid.*)

(90) So doth the crable and choke pere, seeme outwardlye to haue sometyme as fayre a redde, and as melowe a color, as the fruite which is good in deede.
-1563. *Homilies* II. *Alms-deeds* II. 174b (*Ibid.*)

(91) a warm, mellow sound. -*Collins*.

(92) Nitrites have properties commmon to netrates; such as a cool taste.
-1800. tr. *Lagrander's Chem*.I. 252 (*OED*)

(93) Though ... they lost ground, and hunted upon a cool scent.
-1647. N.Bacon, *Lans Eng*.I. lxvii. (1739) 158 (*Ibid.*)

(94) a cool green. -*Ibid*.

(95) Whan he was hottest in his ire. -1390. Gower, *Conf*.III.148 (*Ibid.*)

(96) Hungrie Church-wolves following the hot sent of double Livings.
-*Ibid*.

(97) a hot pink. -*Asia Today Digest*, June 1980 (小西編(1989))

(98) hot sounds of buzzing flies -*Web.3* (*Ibid.*)

(99) a sour mood. -*NWD*²(小西編(1989))

(100) Eysyl or egyr wyn. - c1350. *Med.MS* in Archaeol.xxx.352 (*OED*)

(101) Eve ... With sweet austeer composure thus reply'd
-1667. Milton, *P.L.* ix. 272 (*Ibid.*)

(102) *Austere*, harsh or hard, as in fruits vnripe, and hard wines of hedge grapes. -1601. Holland, *Pliny* Gloss. (*Ibid.*)

TABLE 5 上の表より、気分が視覚に固有の形容詞で表現される傾向が強いのは明らかである。視覚以外の感覚から気分を表すようになった語は、触覚から二例、味覚から三例が見られるだけである。ただし mellow については、視覚、嗅覚、味覚の三感覚間で何れが最も古い用法なのかはっきりしない。ただ気分を表す語の多くが本来、視覚経験を表していたとは言っても、この場合、色でなく光（明るさ）の方をもともと表していた語が多い。しかも一見色を表しているように見える形容詞でも、光(明るさ)の要素が強い。black は色味のない無彩色であり、暗さ（光のない状態）を表す意味あいが強い。また色味を表す blue も、実は black と近い関係にある語で光との結び付きが深い。「目の下の隅」は a black ring, a dark circle とも a (deep) blue circle とも言う（小西編（1989））。blue のものは光が弱いと灰色や黒といった無彩色に見えやすい。blue は光（明るさ）を表す性質も強い語であると思われる。

上の二つの表 TABLE 4 と TABLE 5 より、気分感覚と視覚が密接な関係にあることが明らかとなった。互いに互いを表現し表現される関係にある。しかし TABLE 4 で気分に固有の語が表現できるのは視覚経験のうち“色味”の部分であったし、TABLE 5 で気分を表現できるのは視覚経験のうち“光(明るさ)”の部分であった。このことは同じ視覚経験を表す語でも“色味”を表すものと“光(明るさ)”を表すものとでは、言語上異なる振る舞いをすることを示している。生理学的にも色と明るさは認識のされ方がかなり異なると言われる。光自体は色を持たず、色というのは異なる波長の光が脳で色として解釈されるものだと言うのである。“明るさ”と“色”は別個の感覚と見る必要がありそうだが、この問題については今後の課題としたい。

共感覚比喩の体系

以上、“次元”“動静”“気分”を表す形容詞について、共感覚比喩を介して他の感覚とどのように結び付くのか考察してきた。ここで、これまでの結果をもう一度整理し、Williams(1976)の共感覚比喩の体系にこの三感覚を組み込んだ、新たな共感覚比喩の体系を提示したい。

まず、三感覚について第一節から第二節までにまとめた五つの表、TABLE 1～TABLE 5までを数量的に整理する。次のTABLE 6ではまず、三感覚に固有の形容詞が他の感覚を共感覚により形容する用法の数を、普通の字体で記入している。例えば、“The stew is too flat.”のように次元に固有の形容詞で味覚を形容できる例は七例見られた。よって次元の行の味覚の列は“7”とする。ただし、用例はあっても共感覚比喩による形容と断定できなかったものは除外した。次に、現在は三感覚を表す用法があるが本来は他の感覚を表していたという形容詞の数は丸付き数字で記入している。例えば、“soft movement”のように現在は動静を表せるが本来は触覚を表す形容詞という例は四例見られた。よって動静の行の触覚の列には“④”と記入している。また数値は2以上を有意とみなし、一例しかないものは省略する。尚、列の項目には形容される例が見つからない次元は含まれていない。列に挙げる感覚はまずいわゆる五感を、Williamsの共感覚比喩の体系の方向に沿って記入し、続いて本稿で提案する感覚、動静と気分を記入している。

	TOUCH	TASTE	SMELL	SIGHT	HEARING	DIMENSION	MOVEMENT	MOOD
次元		7	2	8	17			9
動静	④	2		3 (color)	5			2
気分	②	③		4 (color) ②(blue,black) ④(light)				

TABLE 6 .

上の表を見ると、普通の字体と丸付き数字がほぼ相補的に分布しているのがわかる。次元の行では触覚の列に該当するものがなく、味覚の列から右端の気分の列まで普通の字体のみが並んでいる。動静の行では、丸付きの字体が触覚で④であるが、味覚から右の列では全て普通の字体である。次元も動静も味覚より右にある感覚については普通の字体の数字だけが並んでいる。この表で列

の項目として並べた感覚はWilliamsの体系における共感覚比喩の方向に合わせているのだから、この二つの感覚をWilliamsの体系に組み込むとすると、次元は触覚に近い位置に、動静は触覚と味覚の中間に位置づけられることになるであろう。二感覚はその固有の形容詞で、味覚より右に位置する感覚を形容することはあっても形容されることはなく、動静を触覚の形容詞で形容することはあっても動静を表す形容詞で触覚経験を形容することはないからである。気分に関しては視覚の欄に普通の字体と丸付きの数字が並び、その左右で二つの字体が明確に分かれている。視覚の“明るさ”より左には丸付きの数字が並び、視覚の“色”より右には普通の字体の数字が並ぶ。気分感覚をWilliamsの体系に組み込むとすると、視覚とほぼ同じ位置ということになる。視覚を“明るさ”も“色”も区別しないならば、体系の方向においては同じ位置となり、互いに形容し形容される関係ということになる。しかし“明るさ”と“色”を区別するとすれば、明るさ→気分→色と一方向に並ぶことになる。第二節、第三節で見たように、次元、動静の形容詞で表現できる視覚経験も主に“色”の方だった。“明るさ”と“色”は区別すべきか、三感覚以外の感覚との関係も見直すことによって、もう一度“視覚”というものを、今後、検討し直す必要があると思われる。ここで“明るさ”と“色”を区別するかしないかを決めるのは時期尚早であるから、とりあえずここでは一つの“視覚”としてそれ以上は区別しない。ただ気分との関係においてだけは“明るさ”と“色”各々との関係を付け加える形にしておきたい。以上のことを踏まえた上で、新たな共感覚比喩の体系を次に提示する。共感覚比喩の例が特に多く、結び付きが強いと思われるものは、太線で示した。

Williamsのまとめた体系(FIGURE 2)と比べると、動静、気分という新たな二つの感覚が加わり、また次元の位置付けも変化している。しかし全ての感覚がWilliamsの体系と同様に一定方向を成す体系として収まる点は注目に値する。

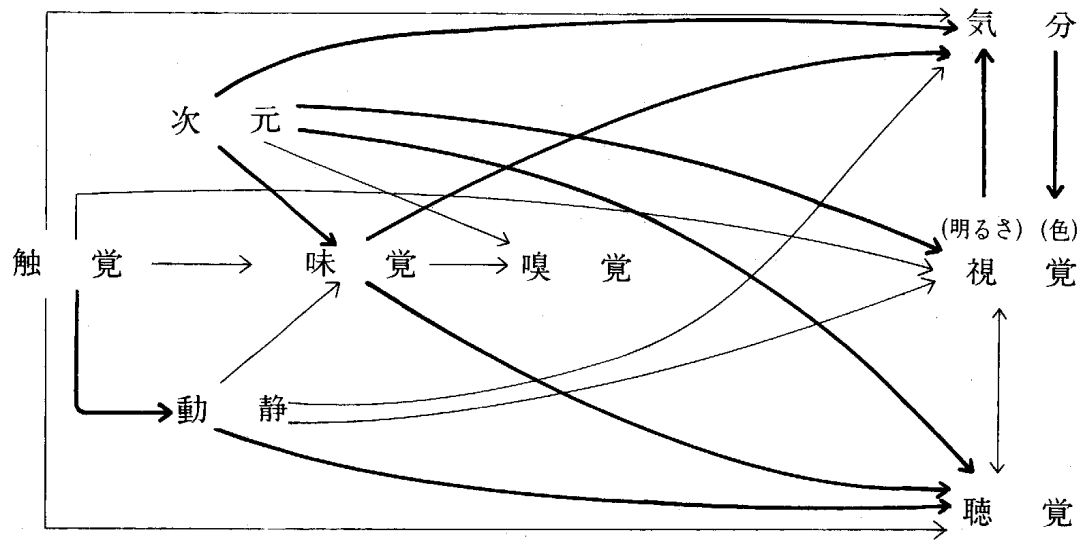

FIGURE 2．共感覚比喩の体系

結び

以上、本稿では英語の共感覚比喩を観察し、五感の形容詞と同じ様に共感覚比喩に用いられる形容詞を分析した。英語という言語において五感の形容詞と同じ位置を占めていることから、人は(少なくとも英語を話す人は)、五感以外に“感覚”として認識しているものを持つのではないかと考えられる。もっともその認識のしかたは無意識のものではあろうが、無意識の認識が言語に現れていると思われるのである。

さて、五感以外の“感覚”とは何であるのか。共感覚比喩に用いられる五感以外の形容詞を観察してみると、その多くが“次元”“動静”“気分”を表すものであることが分かる。また、この三種の意味を持つ形容詞が共感覚比喩に用いられるその方向を調べてみると、各々に独自の規則性を持つことが明らかとなった。次元に固有の形容詞は聴覚経験と気分を表現する傾向が非常に強い。動静に固有の形容詞は聴覚経験を表現する傾向が強いという点が次元と似ているが、動静自体を本来は他の感覚に固有の形容詞で表現する場合に触覚の形容詞が用いられる強い傾向がある。これは、動静を表す形容詞独自の特徴である。気分を表す形容詞は視覚と強く結び付いている。本来気分を表す形容詞は視覚経験（色）を表現しやすく、また本来は視覚（明るさ）を表す形容詞が逆に気分を表現する傾向も強い。形容詞の表す意味の違いに加え、共感覚比喩における各々独自の機能の違いが、“次元”“動静”“気分”という三つの“感覚”の存在を浮き彫りにしている。

山田（1992）の日本語の共感覚比喩の検証においても、同様の結果が得られ

ている。今回の英語の共感覚比喩に関する検証により、日本語、英語という異なる言語において五感以外に同種の三感覚が存在するという注目すべき事実が明らかとなった。

参 考 文 献

Bradley, H. 1891. *A Middle-English Dictionary*. Oxford University Press.

Gove, P.B. Ph.D. *et al*.(eds.) *Webster's Third New International Dictionary*. *G.& C. Merriam Company.*

Hall, E.T. 1966. *The Hidden Dimension*. Doubleday & Company, Inc.

小西　友七（編）1989.　英語基本形容詞・副詞辞典，研究社.

国広　哲弥. 1989. 五感をあらわす語彙：共感覚比喩的体系. 言語，18，pp.28-31.　大修館書店.

楠見　孝　1988.　共感覚に基づく形容表現の理解過程について：感覚形容語の通様相的修飾. 心理学研究，58，pp.373-380.

————1990.　比喩理解の構造. 芳賀　純，子安　増生　編，メタファーの心理学，pp.63-88.　誠信書房.

Lakoff, G. & Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

Murray, J.A.H. *et al*. (eds.) *The Oxford English Dictionary*. Oxford University Press.

Privratsky, K.L. 1983. *The Wild Palms. - A Concordance to the Novel-(The Faulkner Concordances;7)*. The Faulkner Concordance Advisory Board.

Sinclair, J. *et al*. (eds.) 1987. *Collins Cobuild English Language Dictionary*. Collins.

Smith, J. 1989. *Senses and Sensibilities*. John Wiley & Sons, Inc.

Toller, T.N. 1898. *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford University Press.

Williams, J.M. 1976. Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change. *Language*, 52, pp. 461-478.

山田　仁子　1992.　More than Five －共感覚が浮き彫りにする五感以外の感覚－.　徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）3巻，pp.75-83.

————. 1993.－言語は感覚の内視鏡－　共感覚比喩に基づいた形容表現の分析.　*HYPERION* 40巻，pp.29-40.

山梨　正明　1988.　比喩と理解.　認知科学選書　17.　東京大学出版会.